

東アジアにおける「牛の皮一枚の土地」(AT2400) 伝説の展開

斧原孝守

1、はじめに

北アフリカのフェニキア人の植民都市として知られ、古代の地中海に覇をとなえたカルタゴは、紀元前9世紀にテュロス人によって建てられたと伝えられるが、そこには次のような伝説が知られている。

国王ピュグマリオンの妹ディードーは、叔父シュカイオスと結婚する。王はシュカイオスの巨富を狙って殺したがディードーはテュロスの貴族たちとともに財宝を船に載せて逃れ、キュプロス島を経てアフリカに着いた。その地の王イアルパースから牛の皮で覆い得るだけの地面の譲渡を受け、皮を細く刻んで取り巻くことのできる土地を得て城を造り、ピュルサ(牛皮)とよび、これを中心にカルタゴができた(注1)。

この伝説の典拠は古代ローマの詩人、ヴェルギリウスの叙事詩『アエネイス』である。この物語の基本的な形式は、きわめて単純である。

[1] ある人が土地の所有者に牛の皮一枚の土地をほしいという。

[2] 土地の所有者は、わずかな面積と思って承諾する。

[3] ある人は牛の皮を細く切って革紐にし、それで囲えるだけの土地を取る。

つまりは面で請うと見せかけて、面を線に変化させて囲んでしまうという狡智譚である。このような物語は、ディードーの伝説以外にも世界的に知られている。国際的な昔話の類型索引である A・アールネ、S・トンプソンの『昔話の類型』では、「分類できない話」の項目に「馬の皮によって土地を量る」(AT2400)として掲載されており、そこにはフィンランド、エストニア、アイスランド、カタロニア、チェコ、セルボクロアチア、ロシアに類話があると指示している(注2)。またスティス・トンプソンの『民間文芸モチーフ索引』には、「いんちきな土地購入、牛の皮の測量」(K,185.1)として掲載されており、ここではさらにフランス、ギリシア、エジプト、北アメリカのインディアンが示されている(注3)。本稿では、この物語(AT2400, K,185.1)を「牛の皮一枚の土地」とよぶことにする。

トンプソンの索引などでみると、この「牛の皮一枚の土地」はいかにもヨーロッパを中心とした地域にのみ分布しているように見える。しかし、この話が中国では台湾などにやってきた西洋人の借地伝説として清代から知られていることは、つとに日本の学者の注目するところであった(注4)。ただ、この伝説の歴史は西洋では紀元前にまでさかのぼるのに対して、中国では清朝初期までしかさかのぼることができない。したがって、この伝説の東西の一致に気づいた伊能嘉矩が、中国の事例がカルタゴの古伝を「仮借」し「換骨奪胎したる一つの付会」に過ぎないとしたことも当然のことであった(注5)。

ただ、「牛の皮一枚の土地」は、現在の中国でもかなり広く知られている。その流布の範囲

は中国を越えて周辺地域にまで及んでおり、この話が東アジアに広く流行した話だったことは明らかである。つまりこの話は、ヨーロッパと東アジアという、互いに関わり離れた地域を中心にまとまって知られていたのである。その接点が、中国における西洋古伝説の借用であったかどうかはにわかに判断することはできないが、それを見極めるためにも、分布の一方の中心である中国大陆における類話を精査することが必要であろう。本稿は、中国とその周辺地域における「牛の皮一枚の土地」の伝承を集成し、この物語の東アジアにおける展開を明らかにしようとするものである。

2、台湾と呂宋の西洋人借地伝説

1624年、台湾南部の安平を占領したオランダは、そこに本国のゼーラント州の名にちなんだゼーランジア城を築き領土の根拠地とした。台湾史研究の基礎を築いた伊能嘉矩は、大著『台湾文化志』のなかで、18世紀初頭に成立したと思われる鄭亦難『鄭成功伝』を引き、オランダの領土について以下のような伝説を紹介している。

荷蘭は風に遭ひて此に飄ひ、地を倭に借らんとす、可かず。之を給きて曰く、願わくば地一牛皮の如くなるを得ん、多金は惜しまずと。之を許す。乃ち皮を剪りて糸と為し、城を囲むこと里許（注6）。

これが冒頭に述べたカルタゴの由来譚と同型の伝説であることは疑うまでもないであろう。さらに伊能は『台湾府志』所載の例を引き、土地を借りる相手が倭ではなく土着の「土蕃」になっている異伝のあることを紹介している。『台湾府志』の修誌は数度に及ぶが、ここで伊能が紹介したものは、乾隆10年（1745）に成った范咸等の修にかかる『重修台湾府志』であるらしい。しかし台湾の地方志としてはもっとも古いとされる蔣毓英『台湾府志』巻一には、次のような記載がある。

荷蘭人由西洋而來、願借倭彝之地暫為栖止、誘約一牛皮地即可。倭彝許之。紅彝將牛皮剪如繩襖、周圍圍匝已有十數丈地、久假不歸…（注7）

この『台湾府志』の編纂は、康熙25、6年（1686、7）頃にさかのぼるとされている（注8）。してみると、遅くともこの時期の台湾には、オランダ人が「倭」から土地を騙し取ったという伝説が知られていたことになる。このような伝説は、さらに康熙34年（1695）序の高拱乾修『台湾府志』巻一封域志の所伝にも引き継がれているが、乾隆年間に至って「倭」が「土蛮」に書き換えられているのは、台湾史認識の深まりを感じさせる。

ところで伊能は、これと同じ形式の伝説が康熙43年（1704）の自序のある江日昇『台湾外記』に、スペインと呂宋との間の話として記載されていることに注目している。すなわち『台湾外記』には、仏郎機人が呂宋王に一牛皮大の地を得ることを請う。王が許すと仏郎機人は牛皮を細く切って結び、土地を囲って城を築き、樓台を置いて大砲を連ね、王兄弟を殺して国を併合したとある（注9）。ここから伊能は「此異地同轍の伝説は、或る一の根源より胚胎し、一は西班牙の呂宋領有に結びつけられ、一は和蘭の台湾領有に結びつけられ、共に史実なるかの如くに附会せられたるに外ならざるべし」として、この伝説の「一の根源」をカルタゴの建国伝説に求めている（注10）。

スペイン人が呂宋を略取した伝説が『明史』にも載ることは、すでに南方熊楠が指摘している。南方は、雑誌『民俗』に伊能が紹介した『台湾外記』の話にふれた後、『明史』巻323呂宋伝から、つぎのような記事を紹介している。

万暦の時、仏郎機強いて呂宋と互市をなす。これを久しくしてその国の弱くして取るべきを見てとり、すなわち厚き賄を奉じて王に遣り、牛皮の大きさほどの地に家を建てもって居んことを乞う。王その詐くことを慮らず、これを許す。その人すなわち牛皮を裂き、連属て数百丈に至り、呂宋の地を囲みて、約のごとくせんことを乞う。王大いに駭く。しかれども、すでに許諾したれば奈何ともすべきなく、ついにこれを聴す(注11)。

この話は、時代を万暦とするなどやや詳しくなっているが、内容的には『台湾外記』の所伝から出るものではない。おそらく清代初期、西洋人が牛の皮一枚の土地を求めると称して土地を略取したという伝承が、呂宋や台湾でのことであると揺れ動きながらも、一つの異聞として知識人のあいだに知られていたものであろう。

これら清朝初期の史書に記された伝説には、ひとつの共通項がある。それは、「牛の皮」のトリックを使うのが必ずオランダ人など西洋人であり、しかも騙されるのは漢人ではなく周辺の異民族になっていることである。当時すでに続々と来航し東アジアに大きな地歩を占めつつあった西洋人が、無知な原住民からどのように土地を騙し取っていったのかという伝説が、当時の漢人知識人のあいだで、いかにもありうべき話として語り広められていたに違いない。

このような漢人の西洋人に対するイメージが小説のかたちで膨らんだ例が、清初の短編小説集である蒲松齡『聊齋志異』の「紅毛氈」という話である。

紅毛人が沿岸警備の司令官に上陸させてくれるように求める。司令官は相手が大勢なので上陸を許さない。しかし紅毛人が絨毯を一枚敷くだけの土地を戴ければよいというので許可する。紅毛人が置いた絨毯には二人しか入らない。それを引っ張ると4、5人入るようになり、引っ張れば引っ張るほど大きくなって、毛氈が一畝ほどになったときには、数百人になる。それが短刀を一斉に抜いて不意に飛び出し、数里の地が掠奪を被ってから立ち去った(注12)。

これはいかにも紅毛人の呪宝譚のようでありながら、その下地に例の「牛の皮一枚の土地」の伝承があったことは間違いあるまい。古く唐代のいわゆる「胡人採宝譚」以来、紅毛碧眼の西方人が漢人の理解を超えた知識や文物を持っているということは、これらの説話の常套であった(注13)。この話も唐代以来のそうした伝統をふまえたかたちで「牛の皮一枚の土地」の話を巧みに焼き直したものであろう。「紅毛氈」が蒲松齡じしんの翻案であったという可能性も否定できないが、『聊齋志異』が成ったとされる康熙年間初期には、すでにこのような形に変化した物語が彼の住んだ山東のあたりにまで知られるようになっていたのかもしれない。

これらの話の記録が康熙年間(1661～1722)に集中しているのは、この時代に「牛の皮の土地」が大いに流行したことを示すものであろう。オランダによるマカオ攻撃は、康熙帝即位をさかのぼること四十年、明の天啓2年(1622)である。その翌々年には台湾が占領されている。これらの事件は明末の人々にはそれなりの衝撃を与えたに違いあるまい。それが一定の

「発酵」期間を経て一つの伝説となって流行したのが、康熙年間であったのであろう。いずれにしても、西洋人の渡来による緊張がこのような物語を支持する一つの力になっていたと思われる。

3、現代中国における類話の展開

清代初期の文献に散見する、西洋人が牛の皮一枚の土地を欲すると称して広大な土地を奪い取ったという伝説は、現代中国においてもそれなりに命脈を保っている(注14)。現代の台湾でも、オランダ人が高砂族の頭目から土地を騙し取った話として『台湾府志』と同じ形式の話が伝えられているが(注15)、華北ではずっと新しい時代のことになっている。

河北省の例ではアヘン戦争の時にイギリスと交渉に当たった満洲旗人の琦善の話になっている。皇帝が国中の鍛冶屋を天津付近に集め、港封じの鎖を作らせて港を封鎖しようとする。外国人は、琦善に鎖を買いだいたいもちかけ、牛の皮一枚の広さでいいといって銀を渡す。外国人は大きな牛を殺し、その皮を片端が交互に繋がるように細く切る。そして船を通すので鎖を牛の皮の長さだけ開けろといって皮を伸ばす。鎖が開かれると外国人の船が侵入し、ついに港は外国人の手に落ちてしまった(注16)。ここでは牛の皮の使い方がかなり変化しているが、清朝初期以来の西洋人による借地伝説からの変化であることは明らかである。むしろ港を封鎖する鎖の話になりながら、なお牛の皮の趣向を留めているところに、背後の伝承の厚さが推測できそうである。

はたして類話は北京にもあった。北京市昌平区十三陵長陵村に伝わる伝説では、西太后の時代のことになっている。西太后が西洋人から金を借りるが返せない。西洋人はその代わりに牛の皮一枚分の土地をほしいという。西太后が許すと、西洋人は皮を細く切って繋ぎ前門に土地を得たという(注17)。状況の設定は様々だが、アヘン戦争に始まる西洋諸国の中国への侵略が、古い借地伝説の伝承を再生させているように思われる。ただ、琦善も西太后も満洲族である。これらの新しい伝承が、西洋人が漢人以外の民族を騙すという、『台湾府誌』以来の伝統をふまえているのは面白いことである。

「牛の皮」の類話は漢民族を離れて雲南の少数民族にもある。雲南省文山の苗族の伝えではフランスの侵略と戦った苗王、項从周の逸話としてみえる。19世紀末、フランスは雲南の苗族地帯に侵入したが、項从周の機略によって常にその目的は阻まれていた。ある時、フランスの使いが項のもとに現れ、大金と宝石と引き替えに牛の皮一枚の広さの土地を要求する。項はこの地の一草一木は中国のものであると説き、使者を追い返した。項はどうしてそんな小さな土地を売らなかったのかと尋ねた人に対して、彼らは牛の皮を細く切って伸ばし、山をも囲んでしまおうだろうと答え、人々を感服させたという(注18)。

同省双江県に住むチベット・ビルマ語族のラフ族では、今世紀はじめのキリスト教の宣教にまつわる話になっている。光緒年間(1875~1908)、永偉里という米国の宣教師がラフ族のあいだにキリスト教を宣教した。彼は宣撫に金を贈り、牛の皮一枚の広さの土地をほしいという。宣撫がこれを許して糯福ラフ山区に案内すると、彼は牛の皮を細く切って繋ぎ、一山を占めてしまった。彼は民国10年(1921)になって双江ラフ族地区にも宣教したが、ここでも「牛皮蓋

地」の方法を用いたという(注19)。米国の宣教師が同じようにして漢人支配者から土地を騙し取ったとする伝えは西双版纳のタイ族にもあり、ここでも1910年前後の事だとする(注20)。この時代、雲南の少数民族地帯では、数多くの欧米の宣教師が布教にあたっていたが、ここでは伝統的な借地伝説がほとんど世間話の水準で語られていたことが知られるのである。

四川省のチベット族には、これらとはやや違った形の類話がある。ある国の王妃が、厚く仏教を敬っている国王に自分の子供のために塔をたてる土地をほしいという。王がどれくらいの広さかというと、牛の皮ぐらいの土地だという。王が許すと王妃は皮を細く裂いて土地を囲い、ここに全国最大の仏塔を建てたという(注21)。

チベット族の話はやや異質だが、これら少数民族地帯の例を見ると、漢族の伝承とは逆に騙されるのは漢族の支配者になっている。少数民族のあいだではそれなりに構想を変化させつつも、この物語は彼らじしんの伝説として生きていたのである。しかしこれらの伝説が少数民族の伝承においても対漢民族のこととしてではなく、ほとんどの場合、対西洋人の枠組みで語られているのは注目すべき点である。「牛の皮一枚の土地」の伝説は、西洋人との関わりの中において強固な伝承を保持してきたのである。

4、「魔法の袈裟」の物語

カルタゴの建国伝説によって知られる「牛の皮一枚の土地」が、中国でも台湾や呂宋の話として伝えられていたことを指摘したのは伊能嘉矩であったが、それがさらに広い底辺をもつことを論じたのは南方熊楠である。南方は、西晋の安息国三蔵安法欽訳『阿育王伝』から、摩田提尊者が竜にむかって自分が座るだけの土地を要求し、竜が承諾したところ、尊者は自分の身体を国中に満たして座ったという話を紹介している(注22)。さらに南方は『六祖大師縁外記』から、大師が堂宇を広げようとして里の地主に座具の広さだけの土地を求め、地主が肯ったので座具を広げたところ、座具は辺り一面を覆ったとする話を紹介し、それらの説話は「ジドの頓知とは大違いだ、小さいものをだしに使うって広大の地面を取った趣きは同じ」であるとされた(注23)。たしかに南方が指摘したように、これらの話は「牛の皮一枚の土地」と同じ主題によって成り立っている。

このような呪力によって小さいものを大きく広げて土地を奪ったとする伝説は、現代の中国では「魔法の袈裟」の物語として、むしろ牛の皮の物語よりもよく知られている(注24)。

江蘇省南通市に伝わる伝説では大聖菩薩が狼精の支配する山に行って袈裟を敷くだけの土地がほしいという。狼精が許すと袈裟は山頂から麓までを覆う。山を狼の名を取って狼山というようになったという(注25)。浙江省杭州市に伝わる話では、宋の濟顛和尚の話になっている。西湖の浄慈寺が火事で焼けたため、和尚は四川の金持ちのところへ行って木材を寄進してほしいという。どれだけかという袈裟で覆えるだけという。金持ちが承諾すると和尚の袈裟は全山を覆う(注26)。焼けた寺を再建するために材木を寄進させる話は、同省奉化でも布袋和尚の話として知られているが、そこでは袋にはいるだけの材木を乞うことになっている(注27)。材木を乞う僧を布袋にしたための変化であろう。

安徽省の九華山の伝説では、唐の時代、九華山に来た金地蔵なる僧侶が地元の大金持ちに

袈裟で覆うだけの土地を求める。金持ちが肯んじたところ、金地蔵の投げた袈裟は九十九峰を覆い、金持ちは一家を挙げて出家し、家産を投じて寺を建てたという(注28)。これと似た話は福建省の泉州にもある。これも唐代の話だという。泉州城に黄守恭という金持ちがいる。ある日一人の和尚が来て、寺を建てるために家の花園を寄進せよという。袈裟ぐらいの大きさでよいという。黄が承諾すると和尚は袈裟を投げる。袈裟は広がり花園すべてを覆う。そこに建てたのが開元寺だという(注29)。同じ話はさらに貴州省にもあり、赤松子が都使司から袈裟で覆うことのできる土地を求め宏福寺を建てたことになっている(注30)。

このような高僧や仙人による土地占めの伝説はさらに広く展開し、少数民族のあいだにも及んでいる。雲南省大理に住む白族では、観音が人々を苦しめる妖怪を退治する話になっている。観音は犬が三歩跳ね、袈裟で覆える範囲の土地を賭けて妖怪と将棋を指す。観音が勝ったので犬を走らせると、犬はひと跳びで妖怪の支配する土地を越えてしまい、観音の袈裟も妖怪の土地のすべてを覆ったという(注31)。ここでは袈裟の趣向に加えて、犬を跳ばせるという趣向が加わっている。これと同じく観音が竜から土地を奪う話は、浙江省の海寧にもある。観音が人々を苦しめる竜に向かって、矢の届く範囲の土地を借りたいという。竜が承諾したので矢を射ると、矢は遠く杭州竜山月輪峰まで届いたという(注32)。観音が竜から借地したという伝説が、観音信仰と結びついたかたちで広く流布していたのであろう。矢によって土地を占めるという説き方にも広がりがあり、遠く雲南省にすむ彝族の支族たるサニ人のところにまで同趣向の話は伝わっている(注33)。

「魔法の袈裟」の話のごとく、呪力によって小さい物を拵げ広大な土地を囲ったとする話は、中国ではいずれも高僧の靈驗譚として流布している。これは『阿育王伝』にみえる摩田提尊者が自分の身体を大きくしたというインドの話にまでさかのぼり、おそらく仏教説話として流布しながら、それぞれの土地で高僧の奇瑞を示す伝説として定着していたものであろう。

5、中国の「牛の皮一枚の土地」の周辺

南方熊楠が適切に要約してみせたように、「牛の皮」の話と「魔法の袈裟」の話はいずれも「小さなものをだしに使って広大な地面を取る」という単純な主題によって成り立っているが、その違いは小さい物をいかに大きくするかという方法にかかっている。これをいわば知恵の力で成し遂げているのが「牛の皮」の話であり、宗教的な力で成し遂げようとしているのが「魔法の袈裟」の話ということになる。同じ主題が狡智譚と靈驗譚という異なった水準で物語を構成しているのである。

ただ複雑な構造をもつ昔話などと違い、これほど単純な主題によって成り立つ話であれば、このような話は世界のどこにおいても狡智譚、靈驗譚としても独立に発生するとみることもできよう。たとえばアイルランドにも聖人のマントによって覆われる土地の話があり(注34)、これは中国の「魔法の袈裟」と全く同じである。しかし忘れてはならないのは、いかに簡単な伝説であるといえ、これらの話が世界中のどこにでもあるわけではないという点である。たとえば「牛の皮一枚の土地」が典型的なかたちで伝わっているのは、ほとんどヨーロッパと中国に集中している。しかもこの二つの地域の説話群は「牛の皮」の要素も一致している。中国と

ヨーロッパの「牛の皮一枚の土地」も、何らかの歴史的な関係があったとみるべきであろう。

冒頭に紹介したように、かつて伊能嘉矩は、「台湾及び呂宋における租借牛皮大土地の史談」は、「古きカルタゴ神話を仮借し来りて、換骨奪胎したる一の附会に過ぎざるを知るに足る」と断じた(注35)。たしかにカルタゴの古伝が中国にも知られており、これによって西洋人借地伝説が創り出されたとするなら、中国にも「牛の皮一枚の土地」が伝わっているのは当然のことである。だが、果たしてこの清代の「牛の皮」伝説は、当時の中国人がカルタゴの古伝を「仮借」し、西洋人の土地占めの話として「換骨奪胎」したものなのであろうか。

インドネシアには次のような話がある。西セレベスのゴワの国に来たオランダ人が、王に向かって一片の銅貨の大きさの土地を求める。王が承諾すると銅貨を叩き延ばして細い線とし、それで広大な土地を囲い込んでしまった(注36)。これが牛の皮の話からの転化であることは間違いあるまい。しかもこの話では、中国の伝説と同じくオランダ人の話になっている。あるいは華僑などによって中国から伝わったという疑いがあるが、インドネシアにもこのようなオランダ人借地伝説が広く伝わっていたとすると、中国の西洋人借地伝説も外来のものであった可能性がある。

タイには国王に一匹の死んだ猫だけの土地を請うた男の話がある。男は猫に長い縄をつけてはね回らせ、疲れて死んだ猫の動いただけの土地を手に入れたという(注37)。これは狡智譚のかたちを取った借地伝説の特殊な一例であるが、紐を利用して土地を囲い込むという意味では、牛皮の紐と猫につけた縄という違いはあれ、「牛の皮一枚の土地」と極めて似た構想のもとに成り立っている。この物語も「牛の皮一枚の土地」からの変化である可能性が高い。今後、東南アジアの類話の集積が進めば、中国の伝承の性格がさらに明らかになってくるであろう。

6、日本の「牛の皮一枚の土地」

日本にも「牛の皮一枚の土地」の話は伝わっている。それは琉球諸島の宮古島の話である。鬼虎征伐に手柄のあった仲宋根豊見親に、首里王府は望みの褒美を約束する。彼は大きな牛を一頭ほしいという。王が大きな牛を与えると、豊見親は牛を殺して皮をはぎ、それを細かく切って糸で繋ぎ、平良市の境にあるナーマピサスクという大きな土地を囲み自分の所有地としたという(注38)。この話も大きな牛の所望から土地に至る過程に無理があるが、「牛の皮一枚の土地」からの変化であることは間違いない。これには異伝があり、豊見親は長間部落の財産を横取りしようとして、牛の皮だけの広さの土地を要求したのだという(注39)。このような違った説き方が生まれるほど、この伝説は宮古島では知られていたらしい。ただ宮古島は、この伝説が古くから知られていた台湾と近い位置にある。また琉球諸島に中国文化の強い影響があることも事実である。宮古島に伝わる「牛の皮一枚の土地」の話は、中国の西洋人借地伝説を豊見親の話として宮古風に仕立て直したものであったのであろうか。

柳田国男は「神を助けた話」の中で、『仙台封内風土記』から次のような伝承を紹介している。陸前宮城郡北七田の洞雲寺は、奈良時代に定恵という僧が開いた。定恵がこの山に来たとき、山に二人の異人の夫婦が住んでいて土地を与えなかった。定恵は錫杖を立て、その影の

及ぶ所だけの土地を貸せとって夫婦を承知させた。そうすると一山悉く錫杖の影の及ぶところとなり、異人は遂に西の方、根白石の山間に退いた(注40)。

この仙台に伝わる話は、中国の袈裟の話が錫杖になっただけのものである。豊後国本宮山には、まったく「魔法の袈裟」になった伝説がある。本宮山には昔、鬼どもが住み、人々を苦しめていた。ある時、観音が現れ鬼どもに向かって自分が座って法衣を拵げているだけの地面を借りて座す。法衣は本宮山全体を覆い、鬼どもは退去したという(注41)。中国の「魔法の袈裟」が、仏教説話として日本にもある程度流布していたことは間違いあるまい。

柳田は仙台の話を引きいた後、この「話は通例牛の皮で土地を借りることに為って居り、世界中に分布して居る。形を変えて日本にもまだ処々に在る」(注42)として、さらに甲州松里村の松尾六所明神の七不思議の一つという借生檜(かりおいのひのき)の伝説を紹介している。昔六所明神がこの地に出現の折り、地主の松尾神に檜を植える土地一尺だけを借りて、際限もなく檜の苗木を植えた。松尾神が違約を責めると、一尺といったのは、土の中へ根の入る深さだと答える。今もこの森には檜の古木が多いが、根の土に入ることに至って浅いという(注43)。この伝説は狡智譚として特殊に変化したもののように見えるが、まったく同趣向の話は奈良の春日明神と春日山の主の話としても伝えられており(注44)、神の土地占めの話としてこのような形式の話があったらしい。

鹿児島県川内郡には、指一本分の田の話が伝わっている。ある人が殿に指一本で隠れるだけの田がほしいという。殿が許すと指に隠れて見えない所に札を立てて広い田を自分のものにした、という(注45)。類話は他には伝わっていないようであるが、やや無理のある話である。古いところでは、南方熊楠が江戸末期に成った松浦静山の『甲子夜話』続篇に載る話を紹介している。曾呂利新左が豊太閤に紙袋一つのを請う。太閤が許すと、新左は倉を包むほどの大袋を作っていたとある(注46)。この話などは常識的な大きさのものを巨大に作るところがミソであるが、単に紙を継ぎ足して拵げるのであればそれほどの智恵とも思えない。それだけにこういう発想の背後に、何かもっと筋の通った物語の流れがあったのではないかと思わざるをえないのである。

東丹波の保津村には三諦坊という僧が藁一束の土地を借りたという伝説がある。むかし亀山城が傾いてうなり声がするので僧を集めて読経させるが験がない。三諦坊を呼んで読経させるとたちどころに験があったので、城主は謝礼に望む物は何でもかなえてやるという。三諦坊は藁一束分の土地をほしいという。城主が許すと三諦坊は藁を一筋に繋ぎ合わせて山地を囲み込んだという(注47)。これと似た話は、京都の藤森神社の伝説にもある。むかし弘法大師が藤森の社に、稲荷の神を祀るので土地を貸してほしいという。藤森では藁一束分ならいいという。すると大師は藁一束をほどこいて、一本一本を繋ぎ稲荷の山と里を全部囲んでしまう。さらに大師は期限を十年と書かれた証文を呪文で千年に書き換えたという(注48)。

こうしてみると、藁一束分の土地というのは京都近辺ではそれなりに知られていた説きかたであつたらしいが、土地の広さの表現としてはいかにも無理がある。細い物を繋いで囲んだといたいのがために無理に作り上げたように思われるのである。しかしこの話は、面を線に変化させて騙す話であつて、まったく「牛の皮一枚の土地」に等しい。この伝説の背後にはは

「牛の皮一枚の土地」の知識があったと思われる。おそらく日本でも「牛の皮一枚の土地」の伝説が知られていた時代があったが、牛の皮という要素をそのままの形で語ることに抵抗があり、様々なかたちに分化したものと思われる。してみると、宮古島の伝説も一概に台湾からの影響ばかりを考える必要はないということになる。

7、おわりに

東アジアには「牛の皮一枚の土地」と同じ主題をもちながらも、高僧の靈驗譚となった「魔法の袈裟」の物語が早くから知られていた。この話は古く仏典にもみえ、仏教説話として中国に伝わり各地で高僧の伝説として定着したらしい。一方、「牛の皮一枚の土地」は、文献的には康熙25、6年（1686、7）頃に編纂された蒋毓英の『台湾府誌』にまでしかさかのぼれないが、西洋人の借地伝説として広く知られている。これら二つの物語のあいだにどのような関係があったかは分からないが、中国大陸ではそれぞれ独立した類型として認識され、異なった次元で流布していたと考えるべきであろう。

中国大陸の「牛の皮一枚の土地」の展開をみると、沿海部や雲南など、西洋人と接触する機会の多かった地域でこの物語が流行した時代があったことは間違いあるまい。それらはいずれも西洋人借地伝説と密接に結びついたかたちで伝えられており、いかにも近い時代に一元的に流布したようにみえる。

だが、四川のチベット族や日本の宮古島には、西洋人借地伝説に結びつかない「牛の皮一枚の土地」の類話があり、さらにその外側のタイや日本本土にも痕跡的な事例がある。中国に流行した西洋人借地伝説が、崩れながら周辺に伝わった可能性も否定できないが、高僧の伝説として日本に定着した「藁一束の土地」の背後に西洋人借地伝説があったとは考えにくいことである。チベット族など中国の少数民族や日本、朝鮮などの周辺の類話をさらに集めて検討する必要があるが、案外中国大陸には古くから「牛の皮一枚の土地」が知られており、西洋人の借地伝説としての流行は二次的なものであったのかもしれない。

注

- (1) 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』 岩波書店 1960 155～156頁。
- (2) Thompson, Stis : The Types of the Folk-Tale (FF Communications no.84) 1984 p.539
Type no.2400 AT 番号は昔話の国際的な比較に便利なように、同一類型の昔話に付された番号である。フィンランドのアンティ・アールネが考案し、アメリカのステイス・トンプソンが増補した。AT1 から AT299 までは動物昔話、AT300 から AT749 までは魔法の話というように分類される。これによれば「ブレーメンの音楽隊」は AT210、「瘤取り爺」は AT611 である。
- (3) Thompson, Stis : Motif-Index of Folk-Literature. vol.4 1975 pp.251-252 K185,1
昔話や伝説を構成する単位であるモチーフの分類番号である。K は、ペテン、策略を示す。K0 から K99 までは「策略で競争に勝つ」、K100 から K299 までは「い

んちきな交換」を示す。K185 は「いんちきな土地購入」、K185,1 が「牛の皮の測量」である。

- (4) 伊能嘉矩『台湾文化志 上巻』 1928 刀江書院 1965 (復刻) 59 頁。南方熊楠「少しばかりを乞うて広い地面を手に入れた話」、『南方熊楠全集 第二巻』 平凡社 1971 510~514 頁。
- (5) 伊能、前掲書 60 頁。
- (6) 伊能、前掲書 59 頁。
- (7) 蔣毓英『台湾府誌』巻一沿革、『台湾府志三種』中華書局
- (8) 森田明「史料紹介 康熙『台湾府志』について」、『台湾史研究会会報』第4号 1985 9 頁。
- (9) 伊能、前掲書 59 頁。
- (10) 同上。
- (11) 南方、前掲書 513 頁。
- (12) 南方、前掲書 512 頁。常石茂 (訳)『聊齋志異 (下)』、平凡社 (中国古典文学大系41) 1971 270 頁。
- (13) 石田幹之助『長安の春』 平凡社 (東洋文庫) 1967 210~246 頁。
- (14) Nai-Tung Ting : A Type Index Chinese Folktales . (FF Communications, no. 223) 1978 p247, Type no 2400 = 鄭建成ほか [訳]『中国民間故事類型索引』中国民間文芸出版社 一九八六 五二一頁。ここには、以下の例話を指示する。江肖梅『台湾故事』(台北、1973)、Davis and Chou-Leung .Chinese Fables and Folk Stories (New York,1908)、「芸風」四一一、「民間文学」1960-3、「民間月刊」一一九、「天山」1957-10
- (15) 江肖梅『台湾故事』1955 1973 (復刻) 9~11 頁。
- (16) 牧田英二、加藤千代 (編訳)『義和団民話集』平凡社 (東洋文庫) 1973 211~215 頁。飯倉照平「牛の皮一枚の土地」、『中国語』1994年1月号 内山書店 48 頁。
- (17) 『民間文学』1960年3月号 36~37 頁。
- (18) 文山州文化局民族事務委員会 (編)『苗族民間故事』雲南人民出版社 1988 323~324 頁。
- (19) 雲南拉祜族民間文学集成編委員会 (編)『拉祜族民間文学集成』中国民間文芸出版社 1988 278~279 頁。
- (20) 刀永明「在所謂一張牛皮大租地上蓋起了教堂和医院」、民族問題五種叢書雲南省編輯委員会 (編)『西双版纳傣族社会総合調査 (二)』雲南民族出版社 1984 49~50 頁。
- (21) 程聖民 (編)『康区藏族民間故事』 四川民族出版社 1986
- (22) 南方、前掲書 511 頁。
- (23) 同上。

- (24) Nai-Tung Ting 前掲書 p247, Type no 2400A
- (25) 張自強、楊問春 (編)『南通的伝説』 中国民間文芸出版社 1985 11
～13頁。
- (26) 杭州市文化局 (編)『西湖民間故事』 浙江人民出版社 1978 124～
126頁。
- (27) 林蘭 (編)『換心後』1930、東方文化書局 (復刻) 1971 45～4
6頁。
- (28) 施玉清 (搜集整理)『九華山的伝説』 中国民間文芸出版社 1985 22
～25頁。
- (29) 陳焯萍 (編)『廈門的伝説』 上海文芸出版社 1988 86～88頁。
- (30) 貴州省文管辦公室 (編)『貴州文物古跡伝説選』 貴州人民出版社 1985
7頁。
- (31) 李星華 (記録整理)『白族民間故事伝説集』 中国民間文芸出版社 1982
76～81頁。
- (32) 徐建華、宋仲琤 (選編)『中国伝話』 上海文芸出版社 1994 16～1
7頁。
- (33) 曲靖行署民族事務委員会他 (編)『阿則和他的宝劍』 雲南民族出版社 19
85 27～31頁。むかしサニ国に海連という武芸に長じた若者がいた。ある時、
隣国の兵が攻めてきたため、国王は大臣を派遣して海連を招く。海連が敵兵をすべ
て倒したため、国王は海連に褒美を与えようとする。海連は矢が届く範囲の土地がほ
しいといって矢を射る。矢は国境の山まで届き国王は慌てるが、海連は冗談だとい
牛だけを貰って帰ったという
- (34) Thompson, 1975 p,252
- (35) 段宝林、祁連休 (編)『民間文学詞典』 河北教育出版社 1988 429
～430頁。
- (36) 伊能、前掲書 60頁。
- (37) 松村武雄『民俗学論考』 大岡山書店 1930 320頁。
- (38) 琉球大学民俗研究クラブ『沖縄民俗研究』12号 1966 63頁。
- (39) 福田晃、佐渡山安公、下地利幸、岡本克江、山本清 (編)『城辺町の昔話 (下)』
同朋社 1991 473～475頁。
- (40) 柳田国男『定本柳田国男集』第十二巻 筑摩書房 1969 187～188
頁。
- (41) 中山太郎『日本民俗学辞典』梧桐書院 1941、名著普及会 (復刻) 19
80 743頁。借地神話の項。
- (42) 柳田前掲書、188頁。ここで柳田は注記している。「古くは阿弗利加北岸カ
ルタゴの旧史にも見え、又南支那の澳門で、葡萄牙人が之を遣ったとも言われ
て居る」。澳門の例は管見に入っていないが、柳田が中国の事例にも注目して

いたのは面白い。

- (43) 同上。
- (44) 中山前掲書、743頁。高田十郎『大和の伝説（増補版）』大和史蹟研究会 1959 3～4頁。
- (45) 関敬吾『日本昔話大成』第十巻 角川書店 1980 245頁。
- (46) 南方、前掲書 513頁。
- (47) 垣田五百次、坪井忠彦『口丹波口碑集』郷土研究社（爐邊叢書）1925 167～168頁。
- (48) 梅原猛「地霊鎮魂物語」、「読売新聞」1994年12月18日付朝刊。